

沖

4
2022

俳句雑誌【おき】



心の箍

能村 研三

鳩亭の由来

最近「沖」に入会された方から、「鳩亭」の由来について知りたいというお便りがあった。

この「鳩亭」について先師登四郎が、随筆集『鳩の手帖』の中で「鳩亭由来」という一文の中で書き綴っている。これは昭和五十二年三月号の「沖」の五百字随想に書いたものである。

鳩は私のもっとも好きな水鳥で、冬になると必ず「二句は鳩の句を作っているのだ、葛飾の枕詞が「にほどりの」だからである。

にほどりの葛飾早稲を饗すとも
この哀しきを戸に立てめやも

万葉集卷十五東歌
という葛飾少女の素朴で情熱的な恋歌がある。そこで、月並な葛飾の代りに枕詞から取って鳩亭と名付けることにした。

『鳩の手帖』

先師登四郎は生涯俳句の雅号を持つことなく、本名で俳句を作り続けた。これは作家である自分と生の自分とが

線描のごと寒木の空眩し
寒波急都庁全館灯りをり
東京に降る雪本気などはなし
憎めない鬼ばかりゐて豆を打つ
春浅し屏風たたみの予定表
料峭や岬の分つ海の色
並走の電車離るる春めけり
ゆるびたる心の箍や薄氷
オカリナは土の音色や山笑ふ
屑籠に外れし反故や春愁

作品を境にして違う人間になってしまふのを恐れているからであった。「沖」が創刊される前には、句集の序文を頼まれた時に「葛飾書屋」という言葉を使っていたこともあった。登四郎は還暦を過ぎ、時には遊びの気分でリラックスして作る俳句があつてもよいという思いから庵号を名乗ることになった。

これにあやかつて、私の第一句集『騎士』や林翔先生の初めて評論集『新しきもの・伝統』の二冊の本を出版するにあたり自主的な出版社である「鳩書房」を立ち上げたのもこの頃であった。

また、市川の老舗の和菓子店であつた「島村」から、登四郎に新作和菓子の名前を頼まれた時も「鳩」（にほどり）という名前をつけたこともあった。

現在も登四郎の書齋であつた部屋は客間として使っており、登四郎がこよなく愛した庭の木々も育っている。「沖」のホームページでも「鳩亭だより」というコーナーを設けて、随時発信している。

鬣も背鰭もあらむ雪解川

北窓を開けば降り来詩の欠片

下萌や火山のやうな土竜塚

太陽の塔となるべく露の臺

佐保姫の虜となりて野に浸る

走り根を崖に晒して花椿

牛舎にも楽の流れて木の根開く

登四郎先生の有名な「ひらく書」の第一課さくら濃かりけり」という句の「書」

は、当然教科書のことであろう。国語の授業の最初が桜に関する随筆だったりすれば、話は簡単であるがそうではあるまい。多分に感覚的なものと思う。というのは小中高校まで学校という所は、桜が校門とか校庭、その周囲によく植えられている。先生はきつと授業中ながら、窓辺から見えてくる桜の景色に身も心も奪われていたに違いない。

校門の桜と言えば、学校の新学期ということでもクラス集合写真撮影が思い出される。だいたい四月七日前後と思うが、桜はもう終わりの頃である。ようやく四段ぐらいに生徒を並べ終えて、いざ撮ろうとすると桜吹雪になったり、風に髪が乱れると言つて騒ぐ女生徒がいたり、そう簡単には終わらない。桜は何かにつけて人騒がせな花である。

蒼茫集

一茶庵

千田百里

*きのふより遠くを見れば春立ちぬ

料峭や蕎麦湯行き交ふ一茶庵
竜天に登るわたしに戦後あり
鳥帰る逸れむと一羽それは吾
我に寄る流木海市よりの使者
エンターキー押して春愁翔ばしけり

余寒の爪

辻美奈子

*切株の同心円に春立てり

十指みな余寒の爪を鎧ひけり
真空を砕いて冬の流星群
おぼろ夜の表面張力超えて月
いぬふぐり程の勇気を持たんとす
蟻出でて半導体の混み合へり

くの字

頓所友一枝

冬蝶に空降りて来る午後三時
*両国に江戸の残り香牡丹鍋
はらからの記憶寄せ合ひ年守る
裸木に東男の語気見たり
霜除けの蘇鉄くの字に捕へらる
冬の蝶安房の大地に身を委ね

水平線

林昭太郎

いつ訪ふも何か煮てゐる母の冬
海峡の荒れれば香り野水仙
立春の光あつめて水奔る
グラタンに程よき焦げ目春の雪
蒼穹の熱帯びてくる木の芽時
*春立つや水平線はコップにも

ふつくらと

栗原公子

ふつくらと戻す乾物日脚伸ぶ
機嫌よき日なり大根の千六本
*匿まうてやるか追儼の夜の鬼
真さらなる雪への一步畏れもし
雪しんしん灯ともすやうに小さき花舗
嵌め殺し窓に光の充ちて春

湧水

峰崎成規

湧水のひかり脈打ち春兆す
*降るほどに白き翳積む夜の雪
薄氷や言葉ひとつで入る罅
オリオンの方形緩ぶ春の夜
真つ新たな春を摂らむと深呼吸
春の雪母音のやうに耳に触れ

潮鳴集

蜂蜜色

平松うさぎ

梅咲いて庭の四隅を正しうす
少しづつ日運びたる蝶の翅
切り顎の尉の口もと春兆す
* 春の野へ蜂蜜色のノブを押す
凧の海腫の月を遊ばせむ

灯台

大矢恒彦

合戦の果てて月夜の雪達磨
口といふ原始の楽器日脚伸ぶ
飛ぶ鳥も水脈曳く鳥も春隣
やはらかに葉笛吹く寒の明け
* 灯台に夜ゆづらむと春夕焼

魚眼レンズ

小林陽子

ふぐ刺しに命の色の透けてをり
冴返る旅立ちの日の駅ピアノ
魚は氷に上りで子らは雲梯に
しづかなる海の胎動つばめ来る
* 朧夜や魚眼レンズのやうな街

二重跳び

諸岡和子

* 日溜りは蜜より甘し冬の蜂
春光を切つて軽やか二重跳び
野の川の曲りゆるやか猫柳
黒鉄の甲冑に罅冴返る
瑕理なき空剪定の枝はねて

海嘯

栗坪和子

* 海嘯の遠鳴るころや鯨来る
白波の際まで大根あをあをと
北前船絶えし港や鱈を干す
いつよりか花器となりたり炭瓢
風干しの鱧あぶりて四日かな

炬の名一残

三好千衣子

昂りの風筋つかむ紙鳶
二ヶ月の風に抗ふ結び絵馬
流木の裂け目深々彼岸潮
* 目交に叡山据わる炬の名残
葬送の彼方ひとすぢ雁行けり

春禽

兵藤恵

* 春禽となる鳴き合うてゐるうちに
うすらひにゆふべの風の残りをり
一月の光の中に母の家
ジオラマに灯を点らせて浅き春
雛の箱より旧姓の認印

泡の弾力

本池美佐子

風花や手動で開くる一輛車
* 洗顔の泡の弾力寒明くる
鳴き龍に柏手ひとつ余寒なほ
風光る杣の男の命綱
裏山の芽吹き沸騰鳥の声

二月の羽織

富川明子

凧へ真向かふ一步かかとより
野水仙蓄む月の出待つかたち
凍滝の静寂の芯を月渉る
* 嘶家のするり二月の羽織脱ぐ
山笑ふ糸くぼのやうな雪残し

背伸び

七田文子

臘梅や月の零せし涙とも
聴力の不安かすかに雪積む夜
マカロンの色のとりどり春近し
* 春や春背伸びをすれば光る海
子馬跳ね空の広がる草千里

飛鷹選評



能村 研三

梅真白逆さ移りをとくに鶴

枇杷木 愛

「梅真白」というと中村草田男の「勇氣こそ地の塩なれや梅真白」という句を思い出す。俳句では純白の梅の花を、「梅真白」で表現する。滑らかで品格のある白梅を、この五音がみごとくに表現してくれる。びっしりと花をつけ、貫禄十分な梅の木に鶴などが集りしきりに鳴いていると、春が近いことを思わせる。下五の「ときに鶴」の表現はリアリズムがあり面白い。枝にぶら下がるようにさかさまになったり、また、下の枝から背伸びして蜜を吸う姿を「逆さ移り」と表現した。

たちまちに鷹の集ふや犬まほら

牛島 晃江

鷹は翼で気流に乗り、螺旋を描きながら高度を上げていくが、数百羽を超える群れになるとその光景は圧巻である。この現象を「鷹柱」という。鷹は姿に威厳があつて、昔から尊重されてきた。その鷹が集う大空を「天まほら」と捉えたのはすばらしい。「まほら」は、すぐれた良い所、国をいい、同じ意味に「まほらま、まほらば、まほらば」がある。

寒稽占太平洋を蹴り上ぐる

里村 梨邨

里村さんは館山の方なので、こうした光景を海岸でしばしば見ることがあるだろう。空手の寒稽古であろうか。道着姿で海岸を走った後、突きや蹴りの基本動作などを繰り返した。大声を上げて気合を入れ、太平洋に向かって

寒さを吹き飛ばした。

木の芽立つ地球は若きマグマ噴く

平嶋 共代

地球は、太陽系のほかの天体と比べても豊かな生命にあふれた惑星である。四季折々の自然の変化が楽しみに、春になると木々は芽立ちの時期を迎える。しかしマグマが活発に噴く火山を抱えているまだ若い地球でもあるのだ。

耳朶を過ぐ風まだ痛き探梅行 坂下 成紘

早咲きの梅をたずねながら山野を歩く探梅行。梅の咲いているのを探しながら早春の道を行く。まだまだ冬の中で、耳朶を過る冷たい風には痛みすら感じる。坂下さんのお住まいの北陸では風雅な冬の散歩も寒さの中出かけることになる。

年玉や百円札のありし頃

坂井 博

作者は私とほぼ同年代なので、この百円札への思い出は互いに共有できることだろう。百円札が姿を消してから約五十年が経とうとしているが、小さな頃のお年玉はこの百円札を貰えることがうれしかった。

廣重の構図と成れり冬景色

藤野 武彦

浮世絵の廣重が描いた風景画、中でも約二年半にわたって制作した名所絵シリーズ「名所江戸百景」は斬新な構図と鮮やかな色彩で、四季折々の江戸の情景を描き出している。この構図は現代に通じるものがあるが、作者の眼前に広がる冬景色があたかも廣重の絵のように見えた。

隧道を抜けるうしろの寒暮かな

吉村さよ子

作者は余り人が通行しない寂しい隧道を何かの所用で歩いて抜けたのであろうか。隧道を抜けた後、後ろを振り向くとあつという間に暗くなる寒暮。日没とともに、一気に冷え込んできました。

沖作品



能村研三選

竹林の風楓楓と二月来る

静岡

枇杷木 愛

陽を乗せてゆらぐ薄氷つぶやけり
犬ふぐり翳りて千の瑠璃瞑る

*梅真白逆さ移りをときに囀

もぐら穴あけて人の世春寒し

*たちまちに鷹の集ふや天まほら

薄もやの渦なして立つ鷹柱

千葉

牛島 晃江

円心を描くや無音の鷹柱

鷹柱ととのへてゐる気流かな

鷹柱仰ぐ一行黙となる

葛湯とく話上手と聞き上手

*寒稽古太平洋を蹴り上ぐる

寂光の香りを纏ふ野水仙

白鳥翔つ朝の湖面の穢れなし

沖をゆく船を染めぬく初茜

探梅や野末の水の光りをり
湯にひらく指の赤さや寒明くる

平嶋 共代

*木の芽立つ地球は若きマグマ噴く

蜜蜂の巣箱置かるる山しづか

腑甲斐なき事の顛末わらび餅

*耳朶を過ぐ風まだ痛き探梅行

探梅や一輪に足る句の心

石川

坂下 成紘

川の名を変へて湾へと猫柳

殊更に退屈バレンタインの日

野仏の域とし摘まず露の臺

魂のかけら幾億冬銀河

*年玉や百円札のありし頃

初春やポルカの弾む楽友会

真つ当に生きし父母なり年一夜

初凧や成田屋襲名待つ空へ

千葉

坂井 博